

第五章 地域に対する評価

5・1 地域の満足度

「地域の現状に満足している」人の割合は、府中町 89.8%、三次市 58.2%とかなりの差がついており、重回帰分析でも両自治体の「地域差」が最も重要な変数となっている（-.413）。

府中町の地区別では、「西部」の「府中中央学校区」の 93.0%が満足しているのに対して、同じ府中町でも「東部」の「府中北小学校区」は 78.3%と少し下がる。「府中町西部」は「イオンモール広島府中」が立地するほか、商業開発が進んでいる地域で、広島市中心部に出るにもアクセスがよく、分譲や賃貸の住宅供給も活発なエリアであるため、広島都市圏のなかでも若者に人気のエリアと言える（全体では 91.4%）。他方、「府中町東部」は、高度経済成長期に開発されたニュータウンを中心とする住宅地で、「西部」のように活発な新しい商業開発や住宅供給は無く、そのため地域の満足度が少し下がる。

一方、三次市は、「中心部」が全体で 59.3%が満足しているのに対して、「周辺部」は全体で 52.9%と低くなる。「中心部」は広島県北唯一の人口集中地区（DID）を含む市街地であり、どの地区も満足度は 50%を超えている。ただし、「中心部」で最も満足度の高い「酒屋地区」（三次ワイナリー、三次工業団地、市立三次中央病院が立地）であっても 71.4%と、府中町で最も満足度の低いエリアにも及ばない。他方、「周辺部」はおおむね田園や山林が広がる地域であるが、そのなかでも詳しくみると、主に中心部へのアクセスの違いによって、満足度に差異は見られる。市街地に隣接し、車で 10 分程度と近い「和田地区」「神杉地区」「栗屋地区」の三地区については、実数は少ないが満足度が 70%を超えている。他方、「青河地区」「川西地区」「布野町」「作木町」「甲奴町」の五地区については満足している人の割合が非常に少なく、3分の1を下回っている。これらの五地区は、地区内にほとんど（あるいは全く）店舗がなく、三次市市街地までのアクセスもよくないという点で共通している。こうしてみると、「地域差」のかなりの部分が、商業環境の格差と、商業地へのアクセスから説明されることは明白である。要は便利でアクセスさえよければ、総合的な地域の満足度は上がるということである。

それでは、「地域差」以外に地域満足度に対して説明力のある要因として、何が考えられるだろうか。重回帰分析を行ってみると、第一に「個人年収」の説明力がある（-.097）。地域満足度は個人年収の高い人のほうが下がる。特に府中町の場合はそうした傾向が見られるが、詳しく見てみると、男性の個人年収 400 万円以上の層で満足度が落ちている。「個人年収」高いと仕事へのコミットが深まり、府中町の魅力であるところの便利な商業施設を利用することもあまりないためであろう。あるいは、「個人年収」が低くても関係なく、府中町はその充実した消費環境ゆえに満足度が高い地域であるとも言える。また、府中町で

は、年齢が高いと若干満足度が落ちるが、これも同様の説明があてはまるだろう (-.140)。20代は消費や娯楽目当てに積極的に外出する傾向が強いが、30代になるとそれが鈍る。「20代女性」の満足度は94.1%なのに対して、「30代男性」は87.3%。30代になると消費環境以外の部分にも目を向けるので、地域に対する視点が少し変わるのではないかと考えられる。

一方、「地縁組織の活動」(.081)、「趣味関係のグループの活動」(.081)への参加など、**地域活動・社会活動への関与の程度も説明力を持っているが、府中町について限るとそれは有意ではない**。三次市では「職場参加としての地域活動」(.145、「積極的に参加」「一般的参加」で64.9%)や「地縁組織の活動」(.129、「積極的に参加」「一般的に参加」62.0%)への参加の割合は、地域の満足度を高める要因になっている。地域満足度は「地域活動に積極的に参加したい」($r=.261$)とか、「地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある」($r=.251$)とか、「隣近所の人たちと交流することに興味がある」($r=.254$)といった価値観と正の相関関係にある。つまり、地域コミュニティへの関与が深い人は、満足度が高い傾向があるということだ。

府中町と三次市との間には圧倒的な消費環境格差があり、地域満足度はそれによって決まる部分が多い。府中町は年収にかかわらず満足できる消費環境をおおむね実現している。ただし、地域での消費に積極的でない層の満足度はやや落ちる。そして、特に三次市では、地域コミュニティへの参加の割合も説明力を持つ。このような府中町と三次市との間に見られるコントラストは、ある程度、全国の拠点都市と周辺部の地域満足度格差の議論において一般的モデルとなりうるのではないだろうか。

地域満足度の高い人は「階層意識」も高く（「生活水準が高いほう」 $r=.133$ 、「低いほうではない」 $r=.132$ ）、生活満足度、仕事満足度、そして日本社会・政治の評価も含めて、あらゆる現状評価において満足度が相対的に高くなる傾向がある。だが、興味深いのは、三次市の地域満足度が府中町に及ばないけれども、三次市の生活満足度は府中町とほぼ同じであるということである。この点については、総括の章において、引き続き議論したい。

5・2 交通の問題／モータリゼーション

「現在住んでいる地域の交通が不便だ」と感じる人の割合は、府中町**30.1%**なのに対して、三次市は**61.9%**と約**2倍**である。地域差の説明力はやはり大きい (.368)。特に三次市の「周辺部」に限ると**73.2%**とその比率が高い。総合的な地域満足度の低い地域ではたいして「交通が不便だ」と感じる割合が高く、とても強い相関関係がある ($r=.470$)。「交通問題」は地域満足度と最も強く結びつきが強い変数であると言える。また、「今住んでいる地域にずっと住み続けたい」という意識とも最も相関関係が強い変数の一つである ($r=.338$)。その一方、「就労時間」が長いと、「不便」という人が増える (.082)。週あたり

60 時間超の長時間労働者については府中町 48.8%、三次市 77.7%と「交通が不便」と考える人が多くなる。就労時間が長いと、時間的効率を求める意識が強まるためであろう。

府中町のなかではイオンモールまで徒歩圏内の「府中小学校区」が 17.6%と低い、その一方、鉄道駅からやや遠い住宅地である「府中北小学校区」だけは 56.5%と半数以上が不便を感じている。ニュータウンの高齢化とともに交通弱者が増えることが心配される地域である。

これに対して、三次市では「三次地区」だけが 47.8%と半数を下回るが、他の地域は不便を感じている人の割合が半数を超える。三次市中心部、特に十日市地区は徒歩圏内に 2 つのショッピングセンター、市役所、ファミリーレストランなどが集まっており、基本的な日常生活機能は整っている。雇用も比較的狭いエリアに集中しているので、通勤時間が府中町に比べて長いとも思えない。つまり、三次市で「交通が不便」という回答が増える理由は、日常生活上の不便というよりは、主に休日などに広島などの他地域に出るための面倒さを意味すると考えられる。三次市に限った重回帰分析では「中卒」(.179、16.6%)「高卒」(.125、56.4%)で、「大卒」(67.4%)と比べて「不便」と考える人の比率がとでも少ないことがわかる。それも同じ理由で、「大卒」の生活圏のほうが比較的広いからである。三次市で「大卒」の場合、広島など他地域に人間関係が広がっているため、移動範囲が大きくなるぶん、「交通の不便」さが気になるのだと考えられる。

これに関連し、「現在住んでいる地域での生活には、自家用車が欠かせない」と思うのは、府中町 63.4%に対して、三次市は 96.5%。両自治体の差は大きく (577)、三次市ではほとんど全ての人が「自家用車が欠かせない」と回答している。全地区のなかで最も低いのは「府中小学校区」53.0%。イオンモールが徒歩圏内で、鉄道駅(天神川駅、矢賀駅)にも歩いて行けるといふ利便性の高い地域であるため、自家用車の必要性が薄いと考えられるのであろう。ただし、府中町で自家用車の必要がないと考えるのは、主に配偶者がおらず(.131)、女性である場合(.125)である。府中町の独身女性は、自家用車が欠かせないと考える人が 41.4%と突出して少ない。その一方、配偶者のいる男性は 84.4%とその倍以上になる。三次市の場合には独身女性は 94.5%、配偶者のいる男性が 91.6%と両者にほぼ差がないのでは大きな違いがある。これは、配偶者のいる場合の「ファミリー型消費」と、独身女性において活発な「個人型消費」の違いに対応しているのではないかと考えられる。モータリゼーションに依存した「ファミリー型消費」については、府中町も三次市もあまり変わりはない。ファミリーで移動することを考えるとき、公共交通機関を乗り継ぐより、車で移動するほうがずっと快適だ。一方で、私事を中心とした「個人型消費」のためだけならば、むしろ車が無いほうが身軽で効率的であることも多い。しかし、三次市は車が無いと商業施設にアクセスできないので、いずれにせよ車が必要となる。府中町と三次市で自家用車の必要性についての比率が異なる理由は、この点にあると考えられる。

5・3 地域外への移動への関心

「現在住んでいる地域の外に、買い物や遊びに行く必要を感じない」人の割合は、府中町が 47.2%なのに対して、三次市は 7.7%と大差がついている (.527)。三次市の場合は、重回帰分析をしても、社会的属性を問わず、ほとんどが「地域の外に」買い物や遊びに行く必要があると答えていることがわかる。一方、府中町は回答傾向が半々に割れている。「地域の外に」買い物や遊びに行くと考えた傾向は、居住歴の違いによって説明される部分が大きい。府中町は消費環境が充実しているので、「ずっと地元」にいる人については「他地域に買い物や遊びに行く必要を感じない」人が 57.2%と過半数を占める。それに対して、府中町でも「結婚で転入」した人は (40.6%、-.190) や、「他地域で就学後 U ターン」した人 (37.3%、-.112)、「仕事で転入」した人 (39.4%) の否定的な回答が増えるのは、他地域に愛着があり、人間関係もあるためだと考えられる。そして、この項目は「階層意識」とは相関しないが、各種の満足度と正の相関関係にある。そして、定住希望とも強い正の相関がある ($r=.249$)。

「仮に現在住んでいる地域の外に行く機会がなくても、退屈だと感じないと思う」人の比率は、府中町 45.7%に対して、三次市は 17.7%とやはり大差がついている (-.390)。地区別ではやはり消費が至便な「府中小学校区」で 60.5%ととりわけ高い。この項目は、地域満足度と正の相関関係にあり ($r=.311$)、定住志向の強さとも関係している ($r=.303$)。ただし、「階層意識」とは相関しておらず、各種の満足度とも相関しない。「現在住んでいる地域には、刺激的な人との出会いの機会が多い」と考える人が多く ($r=.260$)、人生観としては堅実志向との関係が深い（「平凡で安定した暮らし」 $r=.103$)。三次市の場合、「農林漁業」従事者は、「退屈だと感じない」傾向が強い (.173)。また、「地縁組織の活動」に参加の程度が高いと、「退屈だと感じない」傾向が強い (.146)。三次市では、農村型の地域コミュニティに居場所のある人は「退屈とは感じない」傾向があると考えられる。だが、そういう人たちは少数派にとどまり、その他、ほとんどの社会的属性において「退屈」と感じている人のほうが圧倒的に多い。これに対して、府中町の場合は回答が割れている。最も説明力があるのは「就労時間」で、仕事の時間が長ければ長いほど「退屈だ」と感じる人が増える (-.201)。就労時間が長い人は関心が地域での消費やコミュニティに目が向いておらず、そのために地域の消費環境が充実していても、地域が味気なく思える、という状況が考えられる。また、この項目についても、「ずっと地元」の人は 57.7%が「退屈だと感じない」のに対して、「結婚で転入した人」は 40.6%、「仕事で転入した人」は 31.8%と少なく、差がついている。

「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい」という考えについて、府中町 52.8%に対して三次市は 70.1%と多い (.185)。府中町では平日生活圏と休日生活圏がそれほど変わらないのに対して、三次市では休日に広島都市圏にまで遠出する人が多いという状況が如実に現れている。この項目と地域満足度は負の相関関係にあり

($r=-.111$)、定住志向も弱い (-0.185)。「一生暮らす場所」として、「中国山地のような田舎」を支持する人は少なく ($r=-.155$)、「東京のような大都市」を支持する人が多い ($r=.125$)。そして、自己実現志向と相関が強く、「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」人や ($r=.178$)、「人とは異なる自分の個性を磨くことが大事」という人が多い($r=.201$)。どちらの地域においても、年齢に説明力があり、若いほうが地域外に出かけたいという意欲が高い傾向にある (-0.116 、20代は府中町 55.7%、三次市 73.1%)。また、府中町でも三次市でも「休日には、地域外に出かけたい」人の割合が、「結婚で転入」した人(府中町 62.5%、三次市 79.4%)は高くなる。その一方、「地元在住」の者は府中町 48.6%、三次市 68.2%と低めになる。

一方、「長い休みがとれたとしたら、海外に行くなど遠出をして、見聞を広めることに興味がある」という考えについては、府中町 70.6%、三次市 64.2%である。府中町のほうが「海外志向」「見聞を広める」ことに関心が高い (-0.095)。この項目への賛否は地域満足度とは特に相関がないが、定住志向の弱さと関連がある ($r=-.136$)。職種による違いが大きく、「製造作業・機械操作」に従事する者については府中町 53.4%、三次市 53.7%とポジティブな回答の比率が低い (-0.147)。その一方、「事務職」はポジティブで、府中町 89.2%、三次市 69.7%と、特に府中町において比率がきわめて高い (0.149)。また、「個人年収」による違いもあり、「個人年収 400 万円以上」では府中町 81.1%、三次市 71.1%と高くなる (0.101)。ただし、個人年収が無くても過半数が「興味がある」と回答しており、収入が低いからといって「海外」や「見聞を広める」ことに興味がないというわけではない。「階層意識」が高めな傾向があるが ($r=.179$)、生活満足度ほか現状肯定傾向との結びつきは強くなく、むしろ、「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしたい」等の自己実現志向との相関が強い ($r=.337$)。地域活動・社会活動はその種類によって効果が違う。「海外志向」「見聞を広めること」について、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」(0.091)や「職場参加としての地域活動・社会活動」(0.113)への参加度が高い者は比較的ポジティブなのに対して、「地縁組織の活動」(-0.107)への参加度が高い者はむしろネガティブである。

一言で地域外での活動への関心といっても、消費や人間関係を目的とした都市部への移動への欲求が高い三次市と、その必要性に乏しい府中町とでは回答傾向がずいぶん異なる。ただし、両地域の共通点として、地域外への移動に不活発な「ずっと地元にいる人々」と、積極的な「U ターン層を含む地域外での生活経験がある人々」との間にずいぶんと価値観の相違があることに注目できる。地域社会は流動化しており、「ずっと地元」という居住歴の人は少数派であるので、総じていえば地域外での活動に関心の強い人が多くなる。また、地域外の活動への関心の高さは、「階層意識」とはそれほど関連せず、むしろ人生観の違いとの結びつきが強い。すなわち、「堅実志向」の強い人たちは地域外への移動についての関心が乏しいが、その一方で「自己実現志向」の強い人は「地域にこもる」ことに飽きたらなない傾向があると言える。

5.4 「若者や子育て世代」にとっての地域

「現在住んでいる地域に、20～30代の若者や子育て世代にとって暮らしやすい生活環境がある」と考えている人の比率は、府中町 78.2%、三次市 32.5%。両自治体のあいだで、はっきりとネガ・ポジの分かれた評価が下されている（-.467）。

三次市では近年開発が進み、子ども向けの公園施設なども立地している「酒屋地区」が45.0%と突出して高いが、それでも過半数に至らず、府中町のどの地区にも及ばない。府中町では、「子あり」が「子無し」より評価が高い（.212、81.9%）。ファミリー型の消費環境が整っていることが影響していると考えられる。また、「世帯年収」の違いによって、評価が変わる（.155）。「世帯年収400万円以上」では82.6%と評価が高いが、「世帯年収400万円未満」では68.0%にまで落ちる。一方、三次市では「中心部」と「周辺部」の違いが大きい。「若者や子育て世代にとって暮らしやすい生活環境」があると考えた人の割合は、「中心部」では38.1%なのだが、「周辺部」ではわずかに24.2%である。「周辺部」は若者や子育て世代向けの住宅供給が乏しく、多くが父母と同居している。父母と同居している場合は、別居している場合と比べて評価が低い（-.156、24.4%）。また、「地縁組織の活動」に「積極的に参加」あるいは「一般的に参加」している人は、平均よりも高い38.1%が評価している（.112）。

次に雇用問題について。「現在住んでいる地域に、20～30代の若者や子育て世代にとって魅力的な仕事の選択肢がある」については府中町も29.2%と少ないが、三次市はわずかに8.0%となっている（-.423）。「職場参加の地域活動・社会活動」への参加度が高い場合、比較的ポジティブな評価をする傾向があるが（.107）、ポジティブな回答が多数を占める社会的属性はその他に一つもない。若い世代の雇用について、府中町でも、三次市ほどではないとはいえ、「魅力的な仕事の選択肢がない」という悲観的な認識が一般に共有されている。広島都市圏に包摂された府中町でさえこれほどにネガティブであるのだから、全国の地方圏の若い人の雇用状況に対する見方は相当に厳しいということが推定される。

そして、「現在住んでいる地域に、20～30代の若者や子育て世代にとって魅力的な地域活動の選択肢がある」については、三次市が19.5%と低い評価であるのに対して、府中町は48.4%とかなりの差がある。広島圏全体の地域活動に参加できる府中町と、三次・庄原エリアのなかで選択せざるをえない三次市との差は明確である。だが、実際には、何らかの地域活動・社会活動に積極的に参加している者は府中町では25.8%、三次市では34.6%と三次市のほうが多い。地域活動・社会活動について、選択肢はそこそこあっても参加しない府中町と、参加意欲はあっても選択肢がない三次市とでは、対照的な問題構造があると言える。そして、「選択肢がある」と考えるかどうかについては、実際に地域活動・社会活動に参加している者の評価が比較的高い。特に「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓会等の活動」（.122、府中町56.4%、三次市21.5%）、府中町では「趣味関係のグループの

活動」(.180、55.8%)、三次市では「職場参加としての地域活動・社会活動」(.168、22.5%)に「積極的」ないし「一般的」に参加している者は、相対的にポジティブな評価傾向にある。このほか、三次市では、比較的に関わりが深い「自営業主・家族従業員」で肯定的な傾向が強いことに注目できる(.132)。一方で、「飲食店・宿泊サービス業」はネガティブな傾向が強い(-.121)。

「若者や子育て世代」にとっての地域の現状評価を尋ねた以上の3つの項目は、消費や娯楽の格差を象徴し、いずれも三次市は府中町より肯定的回答が圧倒的に少ない。だが、どちらの地域についても、「階層意識」が高い人については高めに評価する傾向があるという点は共通している。

5.5 地域の交友関係についての満足度

地域の交友関係について、「リラックスして付き合える関係の友人」と「刺激的な人との出会い」とに分けて尋ねてみた。交友関係の状況について、自分と近い関係にある人との結びつき、すなわち「同質的結合」と、自分と異なる立場の人々との結びつき、すなわち「異質性結合」とに分けて考えてみるためである。

「現在住んでいる地域には、リラックスして付き合える関係の友人が多い」と答えた人の割合は、府中町 39.9%、三次市 43.5%とやや否定的な回答が多い。両自治体間の地域差はない。説明力があるのは、第一に居住歴であり、第二に地域活動への参加の程度である。居住歴では、肯定的比率が最も高いのが、府中町では「ずっと地元」(.252、57.3%)、そして三次市に限られるが、「他地域で就学後に U ターン」(.225、51.3%)や「他地域で就職後に U ターン」した者の肯定的回答の比率も高い(.155、61.2%)。いずれも現住所が「地元」である者である。その一方、最も肯定的回答が少ないのは「結婚で転入」(府中町 25.0%、三次市 37.7%)であり、「仕事で転入」も少ない。府中町でも三次市でも、今住んでいる地域が地元である場合は「リラックスして付き合える関係の友人が多い」と考える者が過半数だが、地元でない場合は対照的に少ない。

また、各種の地域活動・社会活動の参加の程度が高ければ、「リラックスして付き合える関係の友人が多い」比率が高まる。具体的には「学校・保育所・幼稚園の保護者または同窓会の活動」(府中町 53.3% = .283、三次市 48.4%)、「趣味関係のグループの活動」(府中町 45.1% = .105、三次市 56.1% = .155)、「職場参加の地域活動・社会活動」(府中町 44.7%、三次市 50.0% = .125)、「地縁組織の活動」(府中町 44.7%、三次市 50.0% = .097)であるが、いずれもそれぞれの活動に「積極的参加」あるいは「一般的参加」している場合に、「リラックスして付き合える友人が多い」人の比率が高い。その一方、「製造業・機械操作」に従事する人は、ネガティブな回答比率が目立って多い(府中町 26.0%、三次市 29.3% = -.120)。

また、「現在住んでいる地域には、刺激的な人との出会いの機会が多い」と思うのは、府

中町 15.7%、三次市 13.3%。肯定的な答えをする人の割合は総じてとても少ない。住んでいる地域では、刺激を受ける人との出会いの機会が少ないと感じている者が多い。重回帰分析では、両自治体の差も有意であり、都市圏規模の小さい三次市のほうが「刺激的な人との出会いが多い」と感じている人は少ない (-.136)。居住歴による説明力も大きく、やはり「他地域に就学後 U ターン」(.146) してきた層や、「ずっと地元」層 (.115) が肯定的な傾向が強いが、「父または母と同居」の場合はネガティブな傾向が強い (-.123)。また、各種の地域活動・社会活動の参加の程度にも、やはり説明力がある。具体的には、「地縁組織の活動」(.098)、「業界団体・同業者団体・労働組合」(.098)、「趣味関係のグループの活動」(.119) に関わりのある人は、比較的ポジティブな回答傾向を示す。

両項目とも、各種の満足度に関わる項目についての現状肯定傾向とも結びついており、収入とは直接関係していないが、高めの「階層意識」と相関している ($r=.176$)。地域の交友関係が充実している人は、生活水準を高めに見積もる傾向があるということである。そして、上記二つの項目をクロス分析すると、「リラックスして付き合える関係」と「刺激的な人との出会い」のどちらも多くないという人が両自治体とも過半数を占める（府中町 56.1%、三次市 53.1%）。地域での交友関係が最も薄いこのタイプは、地元外出身者（府中町 64.9%、三次市 60.8%）のほうが地元出身者（府中町 45.0%、三次市 45.6%）より多くなる。次いで多いのは「リラックスして付き合える関係」の友人はいるが「刺激的な人との出会い」に乏しいと考えている人で府中町 28.4%、三次市 33.6%である。このタイプは、U ターン層を含む地元出身者（府中町 38.1%、三次市 41.7%）が地元外出身者よりも多くなる（府中町 20.6%、三次市 25.0%）。

5・6 地域定住意識

「今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続けたいと思っている」のは府中町 75.1%と多いのに対して、三次市は 56.4%にとどまっている (-.278)。府中町を「東部」（郊外住宅地）と「西部」（商業地域）に分けると、「西部」が 76.8%と高いのに対して、世帯内シングルが多い「東部」はやや落ちて 73.2%である。一方、三次市を「中心部」（人口集中地区）と「周辺部」（農山村地域）に分けると、「中心部」が 54.8%であるのに対して、「周辺部」は 61.2%。世帯内シングルが多いにも関わらず「周辺部」のほうが定住希望者の比率が高い。三次市の中心部で最も人口が多い「十日市地区」は、市内で最も商業施設が集まっている場所であるが、「ずっと住み続けたい」人の割合は非常に低く、約半数（51.8%）にとどまっている。三次市中心部に居住する者は、周辺の農村部に（自分のまたは夫の）実家がある場合も多く、将来的には実家周辺に戻ることを念頭に置いていることも理由として考えられる。

重回帰分析では、地域差の次に居住歴の説明力が大きい。今住んでいる地域が「地元」

である者と「地元外」である者を比べると、「地元」では府中町 83.0%、三次市 70.8%が「ずっと住み続けたい」のに対して、「地元外」が府中町 68.7%、三次市 41.1%と大差がついている（「ずっと地元」.283、「他地域で就学後 U ターン」.258、「他地域で就職後 U ターン」.139）。特に、三次市の「地元外」出身者の定住希望の少なさが際立っている。どちらの自治体でも、年齢に説明力があり、30代になると定住希望が強まる（.115）。また、府中町に限ると、「子あり」（.153）「女性」（.161）で定住希望が増える。子どものいる者や女性にとって、府中町の充実した消費環境は、定住希望を強める主要因である。一方、三次市については、「地縁組織の活動」への参加と定住希望との結びつきが強い（.191）。

定住の希望とは別に、現実的な将来予想はどうだろうか。「20年後も、現在住んでいる地域か、その近くに住んでいると思う」という項目については、府中町 66.4%、三次市 64.7%が同意している。「定住希望」については府中町と三次市の開きは大きいですが、この項目についてはほとんどなく、府中町でも三次市でも3分の2ほどの者が20年後も今の地域に住んでいるだろうと予想している（-.116）。地区による違いも見られない。ただし、重回帰分析をすると「定住希望」と似たような結果がでる。例えば、居住歴による違いは大きく、「地元」が府中町 75.7%、三次市 76.0%であるのに対して、「地元外」が府中町 59.2%、三次市 52.7%と差がついている（「ずっと地元」.353、「他地域で就学後 U ターン」.295、「他地域で就職後 U ターン」.181）。また、「子あり」の場合、定住を予想する者の割合が増える（.100）。「地縁組織の活動」に説明力があり、「積極的に参加」「一般的に参加」している者は府中町 77.0%、三次市 81.3%と定住を予想する者の比率が高い（.188）。このほか、府中町では、マツダ本社工場が立地することと関係するためか、「製造作業・機械操作」の比率が 80.0%と高い。三次市では「学生」で今の地域での定住を予想する者は 13.6%しかいない。

定住希望と定住予想をクロス分析してみると、府中町と三次市の違いがはっきりする。府中町では「住み続けたいが、20年後は住んでいないと思う」という者が三次市 4.6%と少ないのに対し、府中町は 13.4%と多い。生活環境には満足しているが、転勤や就職などの事情でやむを得ずに転出しなくてはいけない事情を考えてのことだろう。一方、「住み続けたくないが、20年後にも住んでいると思う」者は、府中町 4.6%に対して、三次市は 14.2%と多い。つまり、府中町には転勤などの事情のため「やむを得ない転出」となる者が多く、逆に三次市は就職や実家との関係から「やむを得ない定住」となる者が多い、ということになる。また、「住み続けたくないし、20年後には住んでいないと思う」者も府中町 20.2%に対して、三次市 29.4%は多い。

定住希望にしても、定住予想にしても、「階層意識」や経済条件との相関はない。日本社会・政治についての満足度も高くない。しかし、生活満足度や仕事満足度、そして自分の現状評価とは正の相関関係にある。逆に言うと、生活満足度や仕事満足度が低い人たちの定住傾向が弱い。人生観としては、定住傾向の強い人は「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしたい」という考えがやや弱く（ $r=-.085$ ）、「人並みの幸せ」を大事にした

いという志向性がとても強い ($r=.186$)。

5・7 田舎志向／地方都市志向／大都市志向

本調査では、「自分が一生暮らす場所」として「理想的だと思う」か否かについて、「中国山地のような田舎」「広島のような地方都市」「東京のような大都市」の三つを挙げ、それぞれについての考えを尋ねている。それによれば、府中町では「田舎」40.3%、「地方都市」86.3%、「大都市」16.2%となっており、圧倒的に「地方都市」の評価が高く、大都市を評価する者はとても少ない。他方、三次市では「田舎」66.1%、「地方都市」65.6%、「大都市」12.0%となっている。三次市は「中国山地のような田舎」であるにも関わらず、「田舎」と「地方都市」の評価はほぼ同じであることに注目できる。これに関しては居住地区による違いが大きく、三次市を「中心部」と「周辺部」に分けた時に、「周辺部」は「田舎」志向が強くなるが（「田舎」74.0%、「地方都市」60.4%）、「中心部」はむしろ「地方都市」のほうの評価が高い（「田舎」62.6%、「地方都市」67.1%）。

そして、必ずしも「田舎志向」と「地方都市志向」が対立するわけではない。府中町では「地方都市」に肯定的で「田舎」に否定的な人が43.0%と最も多いが、「地方都市」と「田舎」のどちらについても肯定的な人も31.1%と多い。広島都市圏の周辺部の「田舎」を地元とする人も多いためだと見られる。一方、三次市では「田舎」は評価するが「地方都市」を評価しない人は多数派ではなく（27.7%、「周辺部」では33.7%）、「田舎」も「地方都市」も評価する人が最も多い（34.6%）。また、「地方都市」は評価するが「田舎」は評価しない人も多い（27.4%、「中心部」では30.1%）。一方、「大都市志向」を評価して「地方都市」を評価しない人は、府中町2.0%、三次市2.1%しかいない。

府中町では、田舎志向は「大卒」(-.207)や「短大卒」(-.129)で弱い。圧倒的に地方都市志向が強いなかでは、「製造業」の地方都市志向が弱く（75.3%）、大都市志向も相対的に高い傾向がやや目立つが（23.1%）、そのほかに社会的属性による違いは説明力を持たない。

これに対して、三次市の「田舎志向」は、「地縁組織の活動」への参加の度合いが最も説明力が大きい（.263）。また、地元出身者の田舎志向の強さも鮮明である（「他地域で就学後にUターン」.185、「ずっと地元」.110）。「他地域で就学後にUターン」した層のなかでも最も積極的な定住層とみられ、それを裏付けるデータになっている。その一方、特に「田舎志向」の強い職業はなく、そのなかで「公務員」の「田舎志向」が弱いのが目立つ（-.105）。「公務員」はそもそも地元外出身者の職員比率が高く、県職員など三次市に特に愛着のない人も多いためではないかと考えられる。また、「地方都市志向」は「販売」職（.153）や「教育・学習支援」業（.113）で強いほか、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」（.107）への参加も説明力を持つが、特にその強弱が目立つ社会的属性は他にない。そして「大都市志向」についても、「不動産・金品売買」業（.167）でやや高いのを例外とし

て、社会的属性を問わず総じて低い。

「田舎志向」「地方都市志向」「大都市志向」は、様々な価値観の相違とも関わっているその違いについて、偏相関分析の結果を中心にして、詳しくみてみよう。

第一に、「田舎志向」が強い人は、収入や「階層意識」が特に高いわけではないにもかかわらず、生活や仕事、地域や日本社会、そして自分自身の現状についての満足度が総じて高い（生活満足度 $r=.169$ ）。これに対して、「地方都市志向」の人たちは、地域の現状評価（ $r=.138$ ）や友人満足度（ $r=.130$ ）が有意に高いが、その他の項目に現状肯定傾向が見られるわけではない。「大都市志向」の人にはそのような傾向はなく、地域の現状評価については否定的傾向が強い（ $-.126$ ）。そして、「現在の地域における定住希望」についても「大都市志向」の人は顕著に低い（ $r=-.210$ ）。また、「田舎志向」の人たちは平凡でもいいから、人並みの幸せを手に入れたい」と考える人が多い（ $r=.110$ ）。これに対して、「地方都市志向」や「大都市志向」が強い人は「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」傾向が相対的に高い（地方都市 $r=.085$ 、大都市 $r=.162$ ）。

第二に、「田舎志向」の人は、仕事の「やりがい」を重視し、なおかつ低収入や長時間労働などの悪い労働条件に適応しようとする勤勉さがある。「田舎志向」と「やりがいのある仕事をしている」（ $r=.123$ ）という考えとの間には相関関係があり、なおかつ「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわない」（ $r=.190$ ）や「やりがいのある仕事であれば、長時間働いてもかまわない」（ $r=.168$ ）といった考え方についても支持する人が多い。「地方都市志向」や「大都市志向」にはこのような傾向はない。また、「余暇の生活を優先させたいので、仕事で長時間働きたくない」という項目については、「地方都市志向」の人は肯定的な回答傾向が強いが（ $r=.105$ ）、「田舎志向」とはむしろ負の相関関係にある（ $r=.083$ ）。

第三に、「田舎志向」の人は「お互いに協調性があり、同じ目標に向かって一体感のある職場が理想」だと考える傾向が相対的に強い（ $.099$ ）。「地方都市志向」や「大都市志向」にはそのような傾向がない。

第四に、「田舎志向」の人は、家族志向的な傾向が強いと言える。「田舎志向」の人は「家族で過ごしたい」という傾向が強いのに対して（ $r=.112$ ）、「地方都市志向」の人は「一人で過ごしたい」傾向が相対的に強い（ $r=.113$ ）。「親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるのは当然」と考える傾向も強く（ $r=.177$ ）、家族によるケアを優先するメンタリティが強い。「自分の利益と関係なく、自分の身内や仲間のためを考えて行動しよう」という自己犠牲的な考え方の人も多く（ $r=.106$ ）、「地方都市志向」や「大都市志向」の場合には、そのような傾向は強くない。

第五に、「田舎志向」の人は、「地域」における交流に関心が高い。たとえば「地域活動への積極性」（ $r=.274$ ）や、「地域の多様な人たちとの交流への関心」（ $r=.212$ ）が高い。「地方都市志向」や「大都市志向」の強い人たちには特にそういう傾向はない。「地方都市志向」の人は「地域コミュニティ」とは関係のない人の繋がりを重視する傾向があり、田舎志向

の人に比べて「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている」という人が多い ($r=.155$)。

5・8 地域開発についての価値観

「近所の商店街には、大型商業施設や大型小売店にはない魅力があるので、行ってみたいと思う」のは、府中町 50.2%に対し、三次市は 35.2%と少ない ($-.231$)。「職場参加としての地域活動・社会活動」に参加度が深い場合、肯定的な割合が増える (.140)。活動を通して、地域の商店街との関わりが増えるためだろう。地区別にみると、三次市では「みよし本通り商店街」が存在する「三次地区」が 40.6%で最も高いが、他の地域は総じて低い。府中町では、ニュータウンを中心とする「府中東小学校区」は 40.2%と最も低いが、向洋駅前商店街がある「府中南小学校区」で 65.2%と高い。地域別に重回帰分析をすると、府中町では製造業で否定的な度合が高いが ($-.227$)、製造業の中でも「製造作業・機械操作」に関わる人たちについては独身男性が多く、ファミリー消費向けの大型商業施設よりも商店街の居酒屋などを利用する傾向があるためか、むしろ肯定的な度合が高い(.185)。また、「非正規雇用の主婦」は大型商業施設を利用する傾向が強く、否定的である ($-.132$)。一方、三次市では商店街と関わりが深いと見られる「自営業主・家族従業員」が肯定的だが(.102)、その他のほとんどの人にとっては「近所の商店街」に対する期待感は低いと言える。そして、この項目は、収入や「階層意識」とは相関しないが、「地域の満足度」($r=.221$)や「定住希望」($r=.138$)、あるいは「田舎志向」($r=.209$)と正の相関関係にある。

「現在住んでいる地域に、大型商業施設や大型小売店が増えれば嬉しく思う」は府中町 68.1%に対して、三次市は 81.6%とそれよりも有意に高い (.218)。商業開発が既にかなり進んでいる「府中中央小学校区」で 61.4%と最も低い一方、三次市の最大の人口集中地区である「十日市地区」では 86.4%と最も高い。また、配偶者がいる場合のほうが、「嬉しく思う」比率は高くなる (.151)。大型商業施設ができれば、ファミリー消費が充実するからであろう。その一方で、「製造作業・機械操作」に関わる人たちはやや否定的である(府中町 63.3%、三次市 75.6%= $.131$)。そして、この項目については、収入や「階層意識」と相関しない一方で、「地域の満足度」($r=-.084$)や「定住希望」($r=.103$)と負の相関関係にある。「田舎志向」が相対的に弱く ($r=-.192$)、「地方都市志向」($r=.094$)や「大都市志向」($r=.153$)が多くなる。

「地域の開発が進むことで、安全で安心できる暮らしが失われることが心配」という考えに同意する者は府中町 43.8%、三次市 38.7%で、三次市のほうが少ない ($-.107$)。上記の「大型商業施設や大型小売店が増えれば嬉しく思う」人は、地域開発を支持するため、「心配ではない」傾向が鮮明である ($r=-.238$)。三次市に限られるが、「地縁組織の活動」の高さの説明力が大きく、「積極的に参加」ないし「一般的に参加」している人の 48.9%が「心

配」している (.142)。地域コミュニティに深くかかわる人が、開発によって地域が変化することを恐れる傾向があると言える。その一方、「配偶者あり」の場合や(-.144)、「就労時間」が長い人 (-.127) については、「心配」していない人が多くなる。この項目についても、収入や「階層意識」と相関しない一方で、「地域の満足度」($r=.178$) や「定住希望」($r=.254$) と相関し、「地域開発が進むことを心配」している人のほうが「満足度」が高く、「定住希望」も強い。また、「地域開発を心配」する人は、「田舎志向」($r=.288$) との親和性が高く、「大都市志向」($r=-.147$) とは相反する傾向にある。

総じて言えば、三次市の人のお大半は大型商業施設や大型小売店の乏しい地域の現状について不満に思っており、大型開発に伴うリスクも心配していない。これに対して、府中町は大型開発に反対する考えを持っている人が三次市より多い。

5・9 地域コミュニティ

地域コミュニティについての考え方について、三つの項目から探ってみた。

まず、「隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい」のは、府中町 46.8%、三次市 49.1%と回答傾向が割れる。この価値観は、「田舎志向」との相関が強く、伝統的な地域社会の規範とのかかわりが考えられる。「階層意識」とは関係ないが、生活や仕事、地域などの各種の満足度に関する項目の現状肯定傾向とも相関する。だが、注目すべきは、この項目について府中町と三次市との間に地域差が見られなかったことである。すでに見たように、三次市でも「地方都市」志向を持つ者は三分の二ほどを占めていて、「田舎志向」に拮抗している。「何でも相談したり、助け合ったり」するのではなく、一定の距離感を持って近所づきあいしたいという都市社会的な価値観を持つ人の割合については、府中町も三次市もあまり変わりはないと考えられる。この点、大都市と違いがあるかどうかは、興味深い論点である。

この項目について、重回帰分析で最も大きな説明力を持つのは「子ども」の存在。「子ども」がいる場合、近隣との密な関係を望む人の比率は府中町 53.1%、三次市 55.6%に増える (.129)。また、「地縁組織の活動」(.118)、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」(.109)、「職場参加の地域活動・社会活動」(.089) という各種の地域活動・社会活動への参加の度合も関係する。このほか、「世帯年収」が低いほうがこの考え方に同意する傾向が強い (-.098)。特に三次市ではそうした傾向が強く (-.169)、世帯年収が低いほど、近所の相互扶助を必要としている人が増える可能性を示唆している。

これに対して、「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある」という考えを持つ人は、特に収入が高いわけではないが、生活水準が高いほうだという人が多い傾向にある ($r=.184$)。また、地域満足度をはじめとする各種の満足度との相関も高い ($r=.251$)。ただ、全体としては、府中町 40.8%、三次市 42.2%として否定的な傾向のほ

うが強くなる。重回帰分析をして「興味がある」人のプロフィールを探ると、まず、現在すでに各種の地域活動・社会活動に実際に関わっている人である。ほとんどの地域活動・社会活動で、参加度が強いと「興味がある」傾向があり、「趣味関係のグループの活動」に「積極的に参加」「一般的に参加」している人については、府中町 56.3%、三次市 59.5%と半数を上回る (.120)。その一方、「学校・保育園・幼稚園の保護者・同窓会の活動」と「職場関係の地域活動・社会活動」については、他の活動と比べて、「多様な人たちとの交流に興味がある」程度が比較的低い。異業種交流のできる趣味関係の活動では「多様な人たちとの交流」が魅力の中心になるのに対して、「学校・保育園・幼稚園」関係の活動はニーズを共有する者どうしの同質的な繋がりになる傾向があるためではないかと考えられる。ただし、「家事時間」が長いと「多様な人たちの交流」に興味を持つ傾向が強く、主婦層はママ友的な関係にとどまらない、幅広い人間関係へのニーズを持っていると見られる (.190)。

このほか、「地域の多様な人たちの交流」に関心があるプロフィールとしては、第一に「大卒以上」の学歴が挙げられる (.105)。学歴の高さは、一般的な他者への信頼を高め、異質な人との交流への抵抗感をなくすということであろうか。第二に、「自営業主・家族従業員」である (.086、府中町 66.6%、三次市 68.2%)。これは、ビジネスが地域と密接に関連しているということが考えられる。第三に、三次市に限られるが、「他地域で就学後 U ターン」した層である。就学後に他地域から U ターンした者は、I ターン者と同じく外部の視点があるゆえに人材の多様性への感度が高く、その一方で同級生関係などの地元の付き合いも多いゆえに「地域の多様性」に対する関心が高くなるのだと考えられる。第四に、年齢の若さである。20代は府中町 45.1%、三次市 47.5%と割と高い。地域に居場所を確保するために、年齢が若いほうが、人付き合いを広げることについて積極的であるということだろう。

そして、「今後、地域活動に積極的に参加したいと思っている」のは、府中町 38.1%、三次市 45.6%。三次市でも半数を下回るが、府中町よりは多い。やはり「階層意識」との結びつきが強く、地域活動への参加意思の強い人は、各種の生活満足度も高い（地域満足度との相関は $r=.261$ ）。重回帰分析では、特に三次市の場合、「他地域で就学後に U ターン」した人のポジティブさが目立っている (.135)。また、「大卒以上」でやや多くなる (.078)。その一方で「飲食店・宿泊サービス業」(-.091) や「生活関連サービス業」関係者 (-.075)、そして「建設作業」(-.109) に従事する者についてはネガティブである。

「地域活動に積極的に参加」するモチベーションは、社会的属性によって異なる。「今後、地域活動に積極性に参加したいと思っている」人の比率は、「家事が主」の人については、府中町 43.6%、三次市 40.8%と両自治体にそれほど差がないのに対し、「仕事为主」の人については府中町 35.8%、三次市 48.2%とかなりの差がつく。一般に府中町よりも三次市のほうが、有業者が地域活動を通して人との繋がりを求めるニーズが高いと言える。その結果、三次市では男性のほうが「地域活動に積極的に参加したい」人の比率が高くなる。その一方、府中町のほうは専業主婦比率が高いぶん、全体として女性のほうが「地域活動に積極的に参加したい」人の比率はより高くなる。だから、他の地域活動・社会活動と異な

り、「学校・保育園・幼稚園の保護者・同窓会の活動」については両自治体の参加度にあまり違いはない。

「隣近所との交流」「地域の多様な人々との交流」そして「地域活動への参加」に意欲的な人たちは、総じて各種の生活満足度が高く、自分自身の現状についての評価も高い。だが、一方で、三項目すべてにネガティブな人たちが府中町 37.7%、三次市 34.1%もいるということも念頭に置くべきだろう。単純に地域活動・社会活動への参加度が高ければいいというわけではなく、人々が地域に関わるニーズの有無、そして地域に関わるモチベーションの多様性について理解を深める必要があると考える。

